第 6 回

Zoom in Human Security
人間の安全保障

「人間の安全保障」の考え方により研修の効果が高まる！

JICAはあらゆる事業に「人間の安全保障」の視点を導入することに取り組んでいるが、研修事業も例外ではない。年間500コース※1、5000人に上る研修員に、「人間の安全保障」の重要性をどう発信していくのか。

国内事業部研修業務グループ
岩井 淳武
Iwai Atsumu

研修員と一緒に考える

JICAは「人間の安全保障」の考え方を伝えることが研修事業の効果を高めるのに有効な視点だと考え、2005年度の集団研修コースの中から10のモデルコースを選び、プログラムに「人間の安全保障」の講義を導入しました。講師は、コースを管轄する国内機関の職員が担当します。私もモデルに選ばれた薬物対策と住宅・住環境改善のコースで講義を行いました。今後各コース担当が講師を務めていくことも念頭に、どうすれば効果的・効率的に準備を行い、「人間の安全保障」をより深く理解してもらえるか、事前にじっくり考えました。そして、教えるというよりも研修員と一緒に考えていく、というアプローチがいいのではないかと思いました。

この点、ただ理論を説明するのではなく、自らの視線で語り、研修コースの内容に沿った具体的なケースを提示して議論を喚起することを重視しました。特に強調したのは、「人間の安全保障はまったく新しいアプローチではないが、人々を中心に据えて、さまざまな関連する分野でのアプローチをいかに組み合わせていくかが課題だ」ということです。

議論が活発になる

実際にやってみて発見したのは、研修員同士の議論がとても活発化したことです。例えば、薬物対策の研修員は警察官、研究者、行政官などバックグラウンドが異なり、また国によっても問題や対策が違います。しかし、「人間の安全保障」は人々に焦点を当てたトップダウンとボトムアップの総合的な視点なので、自分のセクションを越えて、共通の議論の土台が生まれたのです。その結果、それぞれがいろんな気付きを得られ、「人間の安全保障」を一緒に考え、理解を深めることができたと感じました。

モデルコースの中には、アクションプラン※2に「人間の安全保障」の視点を盛り込んだ研修員もいました。また、研修のコースリーダーや研修監理員など日本人関係者にも好印象で、今後も実施したいという評価を得るなど、関係者間での理解も深まりました。

私自身、講義の中で研修員と一緒に「人間の安全保障」を考えることは貴重な経験であり、研修と「人間の安全保障」の関係のあり方をより深く考える機会になりました。今後はモデルコースの評価を行い、成果や課題、拡大の可能性などを検討し、来年度の方向性を決めていきます。

※1 途上国から研修員が来日して行われる集団型研修。分野別と地域別のコースがあり、JICA国内機関のサポートの下、全国各地で実施される。
※2 研修員が研修の最後に作成する、帰国後に自国で取り組む行動計画。

環境保全と持続可能な開発における女性の役割を明らかにし、ジェンダーの視点から環境問題に対処できる人材の育成を目的とする研修「環境と開発と女性」で、1月に行われた「人間の安全保障」の講義の様子